

# systemd を巡る論争とオープンソースにおける思想的対立

○八田真行 (Masayuki Hatta)

Keywords : オープンソース、ソフトウェア開発、設計思想

## 1 目的

本研究の目的は、普及が著しいオープンソースのオペレーティング・システムである GNU/Linux において、起動やシステム管理を行う新しい仕組みである systemd が近年導入されたことで起きたコミュニティにおける対立を詳述し、その背景にある開発者の「思想的対立」を浮き彫りにすることである。

オープンソース・ソフトウェア開発を巡る議論は、純粋に技術的な側面に加え、常にある種の思想的な側面を持っていたが、これまでは知的財産権を巡る対立などごく限られたものしか学術的な研究対象とはなっていない。本研究はそのギャップの一つを埋めることを目的としている。

## 2 方法

本研究の調査・分析方法は、基本的に文献調査である。基本的に公開の場で行われているオープンソース・ソフトウェア開発のため、メーリングリスト・アーカイブや当時のニュース記事、掲示板の書き込みなど、当事者による論争の一次資料が豊富に残っている。これらを渉猟して言説を分析した。

## 3 結果

調査・分析の結果、systemd が導入された経緯と、それに対する開発者間の対立の過程を明らかにできた。

従来 GNU/Linux あるいはその源流となった Unix オペレーティング・システムの多くでシステム管理に使われてきた init システム (sysvinit) が、マルチコア化や非同期並列実行の普及、プロセス間依存関係の深化など、近年のハードウェア、ソフトウェア両面での発展を踏まえると必ずしも最適な解ではないのは明らかだった。ゆえに systemd の登場には技術的な必然性があったことは多くの開発者が認めており、実際に広く普及した。その一方で、中央集権的で肥大した systemd のアーキテクチャには、多くの開発者が違和感、あるいは「感情的」な反発を覚えていたこと、そしてその対立は現在においても続いていることが、本研究によって明らかになった。

## 4 結論

以上により、中央集権の忌避と分散型アーキテクチャの選好、複雑な「ひとつ」より単純な「複数」への選好など、従来「Unix 哲学」等として存在が論じられてきたソフトウェア開発者に広く共有された「思想」を、systemd を巡る論争によって浮き彫りにすることができた。

### 【主要参考文献】

Raymond, E. S. (2004). The Art of Unix Programming. Addison-Wesley.